

水は血より濃し

(Ⅱコリント五・一七、ローマ八・一五ほか)

「血は水よりも濃し」「血は争えない」「血を分けた兄弟」などなど、血族の絆の深さを教える諺は多い。実際困ったときに親族間で助け合い、励ましあうということはよくあることだ。

しかし他方で「兄弟は他人のはじまり」とか「遠くの親戚より近くの他人」さらにはカインとアベルを彷彿させるような「骨肉相食む」などという言葉もあり、先週も浜松で三十代の長男が一家三人を殺害し、一人に重傷を与えたなどという報道も聞く。まったく人間というのは難しいものである。

閑話休題。今日は喜びの洗礼式である。洗礼はイエスを救い主として信じた者が、イエスのために従い行う入信儀礼であるが、この儀礼はイエスを信じて救われたという霊的な、見えない霊的できごとを見える儀式で表現(体験)するものである。K姉が新しく生まれ、私たちの神の家、ベテルキリスト教会の一員になるこの喜びの日、今ひとたびこのすばらしい儀式の中に込められた意味について思いを巡らせてみたい。

一、霊的な誕生

Ⅱコリント五・一七においてパウロは「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です」と述べ、またⅢハネ三・五にはイエス自身が「人は、水と(あるいは「即ち」)御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません」と語っている。これらのテキストから考えますとすべての真正なキリスト者はイエスを信じたときに、聖霊によって新しく生まれた存在であることが解る。

洗礼はこの霊的事実を私たちに体験させるものである。洗礼を受ける者は洗礼槽に全身を浸されるのであるが、それはある意味で赤ん坊が胎内にいるのに似ている。その後洗礼者はその水から出てくる。新しい誕生である。こういつとある人々は「それはアッセンブリーのように浸礼を採用しているところだけのことではないですか?」というかもしれないが、そんなことはない。実際滴礼や灌水礼を採用する教会でも洗礼盤は胎盤を表しているというし、東方教会などでは幼児洗礼の場合は洗礼盤に丸裸にした赤ん坊の全身を浸し、そこから引き上げるのが一般的だと言われているほどである。洗礼、それはまさに霊的に生まれることの類比であり、それを行為を通して告知知らせる営為なのである。

二、神の家族への縁組

このようにイエスを信じた者は霊的に新しく生まれるのであるが、赤ん坊というのは生まればなしいということはない。いろいろとやらねばならぬことがある。その一つが戸籍法に規定されている出生届の提出である。これを怠ると「無戸籍」となり、社会的に存在が認知されない。そこにいるのに、いないものとみなされてしまう。

このことについてパウロはピリピ三・二〇に「けれども、私たちの国籍は天にあります。」と言います。キリスト者は今までの国籍に加え、天国人としての新しい国籍を得ると主張しているのだが、具体的にはどのようなことが起こっているのだろうか。それを解く鍵はローマ八・一五にある。そこには信徒が受けた御霊が「奴隷の霊ではなく、子としてくださる御霊」だと示されている。原文直訳では「養子の霊」だ。聖書の世界でも、日本でも一度養子縁組をすると、その人は相続において実子と全く同じ扱いを受ける。私たちは罪の中にいた者、神から遠く離れた者であったにも関わらず、養子にしてくださいと御霊の働きにより、キリストにあつて神の家族に縁組され、今や長兄であるイエスが受け継ぐもの(よみがえりのいのち、すべての栄光)を等しく相続できる特権にあずかっています。

る。洗礼はその生活の始まりなのだ。

* * *

以下は今月英国から世界を駆け巡ったニユース。ざっくり言えば、ある人がDNA鑑定を受けたら、ずっと父だと思っていた人は実の父ではなかったというものだ。これだけ聞くと「別に珍しいことじゃないんじゃないか」となりかねないのだが、もしこの現実が突き付けられたのが英国国教会のナンバーワンにして全世界七千万人の聖公会の精神的指導者たるカントベリー大主教だとしたら、その衝撃の大きさは想像に難くない。しかも実の父はあのチャーチル元首相の個人秘書というオマケつきだ。マスコミが飛びつかないはずはない。ところが当のジャスティン・ウエルビー大主教はこうコメントしたという。「確かに悲しみはあるし、父にとつては悲劇でしょう。ですがそもそも自分が何者かということはいエス・キリストを通じて見つけるもので、遺産によるものではありません。しかもイエスを通して見出すアイデンティティは決して変わらないのです」と。愛する兄弟姉妹、聖霊の水は血より濃く、キリストの絆による神の家族の特権は肉のそれに勝る。さあ、キリストにあり、聖霊によって神の家族に加えられたK姉の出発をともに喜ぼうではないか。